事になる。故に吾は上行菩薩其人であるといふ自覺は、いひ換ふれば、吾は眞理の化身であり、眞理其者であるといふ自覺であるといふことになる。かやうに解して來ると、日蓮の特殊道も、一般人の普遍道となることが出來るのである。何となれば眞理の化身であり、眞理其者であるとの信念は、佛道に歸依してゐる者であらうと、さうでなからうと、法華經を一代佛敎の中核と信じてゐる者であらうと、さうでなからうと、誰でも齊しく體驗し得る所の信念なるが故である。然らば普遍道としての眞理の自覺とは如何なるものであるか。それは之を種々の名によりて呼ぶことが出來るけれども吾々は之を「人格の自覺」卽ち「吾は人格者なり」といふ自覺といつてゐる。是の自覺は萬人がなし得る自覺で、而してそれは一切道德の根柢となる者で、又それは無限の力の發露でなければならず、絕對の權威の淵源でなければならぬ。力としての倫理は此に到つて始めて正醇なる者となり、又普遍なものともなつて來るのである。

六

樗牛は好んで平家物語を讀み、又其中から種々の題材を取り、稱して日本文學第一の文章といつてゐた。私は思ふ、樗牛自らが平家物語であり、平家其者であつた。樗牛は純然たる公卿衆のやうに花鳥風月をあはれと思ひ、情懷を塵寰の外に馳せることも出來た人間である。否それには寔に豐かな天分を惠まれてをつた人である。しかし一生其調子でやれる男かといへば決してそうでない。いざといへば物の具執つて戰場を縱橫に驅逐し、當るを幸ひ薙ぎたて切りたて、而して槊を橫へて豪快氣を吐くことをやりたい人間であつた。平家の公達等が、一面には眉を畫き、齒を涅にして、金殿玉樓の中に詩歌管弦を事として、雲上人の態を粧ひ之を喜ぶと同時にやはり武人として一朝事あるの日、甲冑に身を固めて矢石の間を往來するを忘れなかつた。是の文と武と、柔と剛とを有つてをつた平家が樗牛その人であつた。

又平家及平家物語の詩美はどこにあるかといへば、平家の運命の倏忽の間に轉

變した處にある。「祇園精舍の鐘の聲、裟羅双樹の花の色」は、そのまゝ平家其者の運命であつて、決して形容の文句でも何んでもない。一門の公卿すべて十有六人、殿上人三十餘人、諸國の受領、衞府、諸司六十有餘、而して彼等の采邑は全國六十餘州の半ばに及び、聚樂の玉樓に一代の榮華を恣にした。が、しかしそれは束の間、治承の秋の屋島、壇の浦の斷末魔は踵を接して廻り來た。これ程有爲轉變の劇しい運命はない。平家の詩美是にあり、平家物語の韻律此にかくれてをる。樗牛が豐なる天分を以て、絢爛氣魄の文章を屬して、都鄙至る所に文名を謳はれ、世間から其造詣する所どんな所にまでいくであらうと矚目されてゐる間に、而立を過ぐること僅かに二歳にして忽焉として委を地上から消してしまつた處に、平家のやうな所があり、而してそこに無限の恨があると同時に盡きない美はしい詩味がある。平家が國史上の永遠に涸れない詩材であるならば我が樗牛は國文學上の悠久の寶玉として遺ることを願はしく思ふ（了）。

——「了酉倫理會倫理講演集」、大正十二年三月號所載——

三　愚佛庵日記の中から

——大正一三・一〇・二二（水）、米國紐育市日本倶樂部の一室に於て——

紐育市倫理修養會教會

△フェリックス・アドラーが主唱して起した米國の倫理修養協會は、その總本部を當紐育市におき、米國の各都市に亙つてその支部を設けて盛に教化事業を行ひ、その一端として日曜毎にその會堂に於いて俗人說教をやつてゐることは、人の多く知つてをる通りである。

△私は紐育に着いた第三日目の日曜日大正一三・一〇・一九に、その總本部の會堂に於ける會合に出席して見た。會堂は中央公園西第六十四街の角にあり、復興式の、壯嚴とはいへぬが、氣の利いた立派な建物であつた。入口の階段敷石を登ると、

そこに玄關代りの廊下があつた。そこに此協會で出版した所の種々の書籍やパンフレットなどが陳列されてゐて、志望者に賣り渡される。私もその中から二三を買つた。私が會堂に辿りついた時は、豫定の開會時間である十一時の前、約二十分であつたが、その頃から御定連らしい人達がぽつぽつ集つてゐた。やがて十分程前になると、オルガンの音が緩く堂内から流れ出る。その音に吸ひ付けられて私は堂内に入つた。入口に一人の幹事らしい人がゐてその日のプログラムを印刷した者を頒けて、而して御席はどこでも御自由に御かけくださいといふ。私は講壇に最も近く第一線に席を占めた。

△堂内の模様を觀ると、室の構造から、席の取方、オルガンの取付け、すべてありふれた新教の教會堂のそれと略同じやうな型であつて、特別に異つてをる所がなかつたが、唯講壇上のなげしの上に刻されてある銘が「諸人が最高の理想に會はんと求むる所の場所ぞ聖地なる」といふ文句のみが、何となくそれらしい。

△又會合その者のやり方も大體新教式のものであつて、先づ最初オルガンの音樂があつて、次にヴァイオリンの奏樂があり、十一時になると當日の司會者であり、說

教者である人が壇に立つて、近代哲學者の書物中から選んだ彼等の趣意に合した文句を讀む。是が教會の聖書朗讀に當たる。その後で教會の祈禱に相當する所の默禱(Silent Communion)をやり、又オルガンがなつて、それから愈說教が始つた。

△當日の司會者、兼說教者はアルフレッド・ダブルユー・マーチンといふ人で、當日の題目は「宗教の本當の基礎卽ち究竟的精神的需要」(The Real Fundamentals of Religion or Ultimate Spiritual Needs)といふのであつた。宗教の本當の基礎は一、信念(Faith)二、精神的體驗(Spiritual Experience)三、絕對と吾との關係(The Relation of Myself to the Absolute Moral Ideal)四、眞理(Truth)の四つである。その四つを具備したのが宗教で、吾々の倫理修養會は他人に信仰を强ふるといふことをば絕對にしない。卽ち信仰個條を造つてそれで拘束することをば、決してしない。人々の信仰は全くその人々の自由である。吾が修養會の人々は何人でも他人に說かんが爲めに說くことをするのでない、全く自分の思想を他人の前で述べさしてもらふ爲めに述べるのに過ぎぬ。自分が今說くのも、諸君へ對して(for)說いてをるのでない。唯此會の一人として(member of it)述べさしていただいてをるに過きぬ。プロフェッサー、アドラーでも、決

して彼の信念を諸君に强ひる者でないといふことをば、可なり力を入れて斷つてゐた。是が從來の宗教とは全く異ふ所であるぞといふことを印象せしめる爲めであらう。――しかし此一節をきいた時に私は少し變に思つた。倫理修養會の創立されたのが今から殆ど五十年卽ち半世紀前の一八七六年で、その間かうした會合は始終持續してゐたであらうが、從て協會のさうした趣意はもう多くの人々に徹底してをるであらうと思はれるのに、今猶かうしたことをマーチンの口から言はねばならぬといふのは、どうした譯のものであらうか。かやうに一寸變に感じた。或は此會合に出る人達の多くは通りかゝりの通一遍の人達であつて、常會員ともいふべき者は極めて少いが爲めでもあるだらうかなどゝも考へて見た。

――此次に會つた機會にはさうした事をも質ねて見たいと思つてゐる。說教は正味五十分、零時五分に終へた。目下流行の新教の說教は大抵長くて四十分、短ければ三十分位で、說教は短い程牧師さんの評判がいゝのであるが、それに比べるとマーチン氏のは中々の長說教といつてよい。

△マーチン氏は打ち見たる處五十格好の老紳士で、中々立派な辯舌の持主であつた。聽衆は私が堂に入つた頃には、まづ彼是れ百人そこ〳〵かと見られたが、その後だん〳〵增して、說教中私が後方を顧みて、大積りに計算した處でも、三百は優にあつたやうだ。――私は思はず、中島編輯主任君が震災前の帝國教育會の講壇に立つて、諄々として滿堂の聽衆を舌端に弄する姿をヴィジョンした。――聽衆は老若男女種々の種類を網羅してをつたやうであるが、どちらかといへば若より老の方が多かつた。

△說教がすむと又オルガンで、それが終へるとマーチン氏再び壇に立つて次の日曜日會合の披露をされてゐた。それによると、次の日曜日にはアドラー氏が "Ethical View of Evolution" といふ說教をされるらしい。

△私は說教が濟んでから親しくマーチン氏と握手して、氏の講演に對する私の感想の一端をのべた處、氏は大に感謝してをられた。私は氏の列擧した第三、第四の二點については、よく考へた上でなければ意見は述べられないが、しかし第一の信仰、第二の精神的體驗といふ點については、全くアグリーすることが出來るといつて、多少私の見解をのべたが大に喜ばれた。

△マーチン氏の紹介でそこに出席してゐた紐育の倫理會長ロバート・ディー・コーン君にも會つた。氏は建築家で現在オフィスを持つて仕事をやつてゐる人であつた。氏は又玄關の廊下の書籍を陳列してある處まで私を送つて來て、そこにあつた書物の中で私のまだ所持してゐない者をば記念として贈られ、猶アドラー創立者にも是非會つてもらひたい、紹介するといつて別れた。

△吾が丁酉倫理會が生れてから、はや二十五年になる。二十五年といへば悠久の歴史から見ればまことに計算することも出來ない程の極小時間に過ぎないが、人の一生から見れば人生五十の半である。その雜誌が一萬の讀者を有つてをるといつても、まだ會堂の一つも持つことが出來ないやうでは、決して威張れた者でない。此際だ、復興の時である、一つ會堂建設の計畫を立て、運動を起されては。

クリストの教會

△倫理修養會のことを語つた序に、更に「クリストの教會」の事を述べさしてもらはう。こゝに「クリストの教會」といふのは"Church of Christ"の語を直譯していつたものであるが、今若しそれを「基督教會」と譯したとすると、從來の新教やカトリック教のそれ等と混同される虞があるので特に直譯した譯である。然らばその「クリストの教會」といふのは何かといふと、それは彼の所謂クリスチャン・サイヤンスが建てゝゐる所の教會のことである。

△かく申すと、自分の無學を表はして、諸君の物笑となるだらうと思ひますが、實は私はクリスチャン・サイヤンスなどゝいふものは、唯極少數の一部の人々の間に信仰されてる者で、何等精神的に社會的に重要なる意義をアメリカの社會に有つてをる者ではあるまいなどゝ、よくも研究も調査もせず、――否そんな價値のある者とも思はずに、それに就いては私は無學であつた。處が豈圖らんやだ。當國に來て觀ると、至る所にその堂々たる教會に接する。

△眞先きに驚かされたのは、シカゴに於いてゞある。諸所に新しく建てられたと見ゆる重にゴシック風の――中にはさうでないものもあつたが――實に立派な教會がある。私は最初多分是等はカトリックの會堂でもあらうと思つてゐた。處が、ある時繪ハガキ屋の前で繪ハガキを觀てゐると、私がカトリックの會堂だらうと思

つてゐた會堂が、やはりシカゴ名所の一つにされて繪ハガキに出てゐる。題して第一クリストの教會、第二々々、第三々々と六までである。而してそのクリストの教會といふのはクリスチヤン・サイヤンスの教會のことであるといふことが繪解きで分つたので、私はそこで始めてさうであつたかと、實はびつくりしたのである。

△しかし、その時ではまだクリスチヤン・サイヤンスに私の探究のメスを刺さうとは考へなかつた。その後ボストンに來た。十月十三日はコロンブスの始めて米國に上陸した日ださうで、その日をコロンブス・デーと名づけて、國祭日としてあるがその日のことである。國祭日のことゝて當時參觀中であつたハーヴァード大學も閉るし、又何處へ見物に出かけようといふ氣にもならず、ホテルのパーラーでイーストの「岐路に立てる人類」を讀んでゐた。市中は絶えずコロンブスをセレブレートする種々の行列で賑つてゐる。私は眼を書物からその行列の一つに移して、而してその際傍にゐた一人はもう六十路の坂をばとうに越したであらうと思はれる程の一老婦、今一人は五十になるやならずやと見ゆる初老の婦人、此二人の婦人に、「今通るのは何の行列でせう」と話をかけた。さて此の話が緣になつて、

私と彼等二老婦との間に種々なる會話が行はれた。

△すると彼の老婦人は私に「貴下は、クリスチヤン・サイヤンスをどう考へるか」と、突然の質問を發せられた。段々淡くなりつゝあつたシカゴの印象が再び鮮明に意識のスクリーンに寫映された。私は卽刻「私はこれまでクリスチヤン・サイヤンスといふ者を研究したことがない。從てそれについて學問上の意見を述べることは出來ない。しかし單に自分の趣味だけからいふと、私はクリスチヤン・サイヤンスなどは嫌である」と答へた。

△老婦人は私の此言を聽いてそれは以ての外のことであるといふやうな氣色を示して、貴下は神の存在を信ぜぬか、神は無限の愛情を以て吾等を導き助け玉ふものなることを信ぜぬか……「病氣は決して醫者の力によつて癒るものでもなし、又藥の作用で治るものでもない、唯神の限ない愛の力によつてのみ治されるものである。吾々は神を信じその無限の愛に取縋りさへすれば、それで病氣は治るのである……」そのクリスチアン・サイヤンスを好まないとは、私には甚だ不可解のことである……「貴下は是非之を御讀みにならなければならぬ」と、手にしてゐた雜誌

を示された。觀れば「クリスチャン・サイヤンス」といふ雜誌で、ホテルのバーラーに具へつけてある者である。——私は酒屋へ行つて酒の有害なることを說いたのであつた。

△私の泊つたボストンのホテルはサヴォイといつてコロンブス・アヴェニューにあるが、そのホテルから程遠からぬ處にボストン第一の伽藍がある。私はその前を通る毎に足を停めてそれを眺めてゐたが、その大伽藍こそ、彼等がマザー・チアーチ(Mother Church)として尊崇してをるクリストの教會の第一堂であると老婦は語つた。——老婦は何か鐵道の技師の妻であつたが、その夫に先立たれて今は寡婦になつてをり、ペンシルヴァニアの者ださうだが、今はそこには何もなく、又息子もあるさうだが、それにも賴らず、夫の殘してくれた遺產で何處を家ともなく、アメリカ中をかうして、こゝに一ケ月、彼處に半歲とホテル生活をつゞけてあるく、アメリカにはよくある寡婦型の一婦人であつた。

△この老婦の教育程度はどんなものか、それを示す會話が彼女と私との間に交換されてある。彼女は私の大學教授であるといふことをきいて、然らば貴下は我アメリカと貴下の國と、兩國で教へてゐるかと問ふたり、又は貴下の國ではアメリカ語で教へてゐるかときいたりしてゐた。前者は交換教授かとの意味に解すれば、現代を理解した質問と見ることが出來るが、しかし彼女の質問は無論そんな譯のものでないことは、その時の會話の續き具合でよく分つたし、又後の質問は實に奇想天外から落ちたもので、どうした處で、それは彼女の博識多聞を語る所以の者ではない。

△私は彼老婦に就いて數行を記載した。讀者よ許せ、私の此記載を。私の記載は彼女の境遇、而して彼女の教育程度の如何なる者なるかを表はさんが爲めであつた。而してかうした境遇と、かうした教育程度とは、何等か必然の關係を彼クリスチャン・サイヤンス信仰に有せざるを示唆せんが爲めに述べたものである。——私はまだクリスチャン・サイヤンスを研究してゐない。從て何等確實な學問上のことを語ることは出來ない。が、何となく此クリスチャン・サイヤンスの流行は天理教や大本教などが我が國に流行して、殊に關西方面の都市には天理教の巍然たる會堂建築が所々に見られるのと、同樣の社會心理に基づいてをる者でないかとの暗示

は、我が意識に走馬燈の繪のそれのやうに往來する。

△それに今一つアメリカに特殊の事情がありはせぬかと思ふ。それは此國には都鄙至る所に公共的、社會的のヘルス・サーヴィスがあるが、それは病氣の治療よりはむしろ保健の方の仕事が重であつて、病氣はやはり個人々々で醫者に相談しなくてはならぬ。然るに此國に於いてはその醫師の謝儀が甚だ廉でない。容易なことで醫者にかゝれぬ。下手に醫者にかゝれば、四百四病以内の病氣は癒つてもそれが爲めにその以外の病氣にかゝつて、一生それで難儀しなければならぬといふ虞は十分ある、そこで金錢の計算に鋭い、而してそれに關する配慮は甚だ痛切である當國人は、人間の醫術よりも、むしろ神の靈力に、賴るやうになる。かうした心理もありはしまいかと、想像される。しかし是は眞に他人の病氣を頭痛にやむ底のことで、何等取止つた事柄でない。

△老婦は私にその所謂マザー・チャーチの宏壯で美麗であることを詳しく語つて、貴下も是非一度見に來るがよいといはれた。それによると、内部は五千人を收容することが出來る。而して毎日曜日の御つとめの時には、その會堂が一杯になる。

式はリーダー(Leader)——從來の教會でミニスターといつてをる牧師さんのことを、此處では指導者といつてゐる——の聖書朗讀、説教ですみ、その後で女のオペレーターが種々病氣に對して施術をする者ださうだ。

△倫理修養會とクリスチャン・サイヤンヌ、是等はアメリカの社會的、精神的生活に對して、どれ程の意義を有つてをるであらうか。ミシガン大學のある教授に會つた時に、偶々話題がフェリックス・アドラーの事に及んだ。その時彼は「アドラーはジャーマン・ジューだ。そのことを頭において觀ないと、彼の倫理運動の眞相は十分分らないと」言はれた。成程さうした事もあるかも知れぬ。名だけから判斷しても私の聽いた説教者の Martin 君も、又私に種々の出版物を贈られた會長の Kohn 君も、たしかに獨逸人らしい。それに當コロンビヤ大學の經濟、財政の教授である彼の有名な Seeigmann 博士はその顧問ださうだが、此人も獨逸種である。ジューであるかどうかまでは分らぬが、兎に角獨逸人の間に、多くの指導者と後援者とあるは事實らしい。恐らくは會員も亦獨逸系の人々に多いのでなからうか。

△アドラーの倫理修養會は Foerster の Ethische Kultur の運動の支部でも支會でも

ない、全く獨立したものであることは勿論である。しかし兩者の間に聯絡のあるのは事實である。既成宗教のどれもに滿足が出來ない。しかしながらそれは宗教その者を排するといふのではない。宗教といふ雰圍氣の中にをつて而かも宗派に拘束されない。さうして、その宗教はこの現實の生活を支配する所の源泉であつて欲しい。否それでなければ滿足が出來ぬ。かうした人間の心理は結晶して倫理教といふ體系が出來上る——カントの宗教は正しくそれである。獨逸人であるカントの宗教はそれで、而して今やフェルスターなり、アドラーなり、獨逸人若しくは獨逸系人によつてかうした倫理修養運動が提唱され、實行されてをるのは、決して偶然でないやうに思はれる。從てアメリカ全體の精神的、社會的生活にどれだけの力を有つてをり、又、將來有つことが出來るであらうかは疑問である。

△クリスチャン・サイヤンス、是については私は全く無知である。何事も語ることが出來ぬ。唯人間に病を恐れる心があり、又それは或る祕力によつても、若しくは祕力によつてのみ癒すことが出來るものであるといふ信仰がある限り、五千の會堂も滿員になり、又マザー・チャーチにも增した會堂も將來實現することであらう。

米國學生生活

△これまでとても私の下意識の中にはあつたことである。而してそれは私の意識的生活を動かす大動力の一つとなつてゐたものである。しかしそれは下意識の中にあつて、明かな私の注意の燒點におかれたことも、又考察の主題にされたこともないものである。——それが今回親しく此地に遊んで或る示唆に刺激されて、急に明るい意識の舞臺へ表はされた事柄が二件ある。それはアメリカ人とは何かといふ事柄と、今一つは學生の勞働といふ事柄である。

△アメリカ人とは何かといふことは如何なることをいふか。是もミシガン大學の或る教授の言である。私が初めて彼と面談した時の、彼の最初の言がかうである。「僕はアメリカ人でないから、アメリカのことは能く知らないがね云々」——かうした言を發した彼の教授は如何なる人か、後で他人に聞いた處では、彼はまだ歸化してをらぬかも知れぬ、從てアメリカの國籍にないかも知れぬとのことであつたが、兎に角彼は蘇格蘭人で、もうアメリカへ來てからもう彼是四十年近くにな

り、又此先きどれ程長く此國に居られるのかも知れない。――而かも此人達の往來は、我が日本人が此國に來たり、此國の人々が我が日本へ往つたりしてをるのと譯がちがふ。日本人と米國人とは人種も全く異ひ、言語も全く異ひ、風俗人情一切異つてをる。それゆゑ二十年居つても三十年居つても、外國人といふ氣分はお互の間に殘つてをつてぬけきれないが、それとこれとは譯が異ふ。精密にいへばスコッチの血と今の米人――實はそれはよく分らない、それが問題なのであるが、しばらく米國に國籍を有つてる人を米人と假定しておいて――その米人の血とは異ふものであり、又言語も多少異ふ所があるに相違ないが、その血の異ひといつても、單にいとこ、はとこ位の異ひであり、言語の異ひといつても九州語と東北語との異ひ位のものであつて、英語としては同一のものである。

△さて其いとこ關係のある英語國民の某教授が、彼是四十年遲くも此國に居つて――よし歸化してゐないにしても、そんなことは問題でない――自分はアメリカ人でないといつた。此一言がひどく强い、千燭光の閃光を私の頭にひらめかすべく通電した。もし彼の教授のやうな人でも自分はアメリカ人でないといつたら然

らば何人がよく予こそアメリカ人だといふことが出來るだらうか。一億幾千萬の此國の市民のうちで、予はアメリカ人だとクレームし得る人が幾人居るだらうか。――國籍があるとか、ないとかいふ、瑣末な法律的意味に於いてでなく、社會的の重要な意味に於いて。

△私はかうした示唆をうけてから、それに關聯した種々の事柄を經驗した。アナバ市に於ける或る日曜日の朝のことである。私はホテルのバーラーで「デトロイト・フリー・プレッス」の日曜附錄の寫眞畫報を觀てゐると私の背後から、それをのぞき込んでゐたホテルの室內監督が、瑞典の風景の寫眞版の處を觀て、それは自國の風景だといつた。そこで私は汝は瑞典人か、何時頃此國に來たか、又何時かは母國へ歸る積なのかなど話しかけると、彼は、自分は一九〇五・六年には獨逸のライプチッヒに居り、其の後倫敦にわたり三四年前に當國に來たもので、何時か機會があれば歸國したいと考へてをるといつた。彼、室內監督は終にアメリカ人でない。

△ボストンの靴磨屋で靴を磨かせてゐた。私よりも先きに磨かせてゐたお客が一人あつたが、靴を磨かせながら、その靴磨人に色々話をしかけてゐたが、やがて、

彼は「すると何か、お前は西班牙人か、何時頃當國へ來たか云々」といつた。さうするとその靴磨人は、私のを磨いてゐた男を指して、「是はおれの弟だが、私達二人が國を飛出して、當國へ來たのは、まだ僅かに五六年前のことである」と答へてゐた。是等靴磨の兄弟もまた眞のアメリカ人でない。

△事の序に次の一件は是非述べさして貰ひたい。コロンブス・デーに、ホテルのバーラーでクリスチャン・サイヤンスについて會話したといふ——前節に記載した彼の老婦人と一緒にゐた、比較的若い五十になるやならずの方の女のことである。彼女は私の曾て獨逸に遊んだといふことを聞くや、彼女はすぐ獨逸語で何處にゐたか、何を研究してゐたか、何年居つたかなどと質く。私はそれ〴〵それに答へて、あなたも獨逸に行つたことがあるかときくと、いや行つたことはないといふ。然らば獨逸語は學校ででも稽古したのかと聞くと、いゝえといふ。然らば獨學かときくと、さうでもないと答へる。然らばどうしたのかときくと、實は自分はアメリカ・ボーンであるけれども、自分の親は父も母も兩方とも獨逸のハンノーヴァー生れなので、私は家庭に於いては、自然に獨逸語の雰圍氣中に育てられたのである。

それで私は獨逸語を話すことが出來るのであるが、しかし單に話すことだけが出來るので、讀むことも、書くことも出來ない、しかしそれでもまだよい。私の子供になると、讀むことや、書くことの出來ないのは謂ふまでもなく、終に話すことさへもう出來なくなつてをる。彼の女はかう話した。——貴女は親達の御國へ行つて見たいと思はないかと聞くと、行つて見たいの見たくないなどの話ではありません。是まで幾度かその機會を捉まうと占つてゐたが、不幸にしてまだそれを得ない處であると答へた。彼女は兩親の故國に對して猶強い憧憬を有つてをる。獨逸から移つて來た彼女の親達は、自分はアメリカ人だと言ひ切り得るだらうか。彼女は何等附加の言なしに自分はアメリカ人だといふだらうか。彼女の子供はどうだらうか。凡そ右の親子三代の中で、何等の斷をつけず、何等の躊躇することもなく、予はアメリカ人であるといひ得るのは、恐らく單に彼女の子供だけでなからうか。つまり三代を經過し、始めてどうやらアメリカ意識のアメリカ人らしいものが出來上ると見るのが、先づ妥當な所であらう。——借問す一億幾千萬中、一點の狐疑なしに予はアメリカ人なりといひ得る人間が果して幾何あるだらうか。

△此誰がアメリカ人かといふ問題は、アメリカの社會、政治、經濟、乃至精神的生活の諸問題を解釋する所の關鍵の一つで、而かも其最も重要なる者であると私は考へた。此事はこゝには述べず、他の機會にする。

△今更ながら私が此度の旅行で氣が付かせられた今一つの事柄は學生の勞働、從て勞働神聖の事柄である。米國の學生は貧困學生は言ふまでもなく、多少有福なものでも、自分で勞働して自分の學資を作るやうに心掛けてをることは兼々聞及んでゐた事柄である。しかし私は實際直接して痛切な感激を得たのである。先づ大學には何處にも本部に學生勞働課、若しくは學生職業紹介所ともいふべき一課の事務局があつて、一定の職員が日々その事務に鞅掌してをる。ハーヴァード大學のやうな米國での由緒のある貴族大學といはれてゐる處にさへそれがある。事務局ではビラや刷物をそれぞれの要所要所に掲示又は配布して、市民各位の協力を俟つといつたやうなことまでして學生の勞働を助けてゐる。

△又私は學生の勞働は多く夏季休暇中のことのみ思つてゐたが、さうでない。夏季休暇中にやるのは無論であるが、猶年中絶えずやつてゐる。それでミシガン

大學の大學一覽の卷頭には、あまり多くの時間を勞働に費やして、學業の妨害にならぬやうとの注意書が掲げられてある。又勞働學生の數も、私はアメリカの學生中にはさうした學生もあるといふ位のものに思つてゐたが、中々そんなものでない。ハーヴァードのやうな處では割合に尠いやうだが、ミシガンの如きは甚だ多い。一九二三——一九二四の學年に於いては、學生七人に對して約一人の勞働學生がある割合であつたとの事である。同學の學生總數は約一萬であるから、勞働學生の數は約一千四百位あつた譯である。

△勞働は多く筋肉勞働である。私の宿つてゐたアナバ市のホテル・アレネルの食堂の給仕人の三人までは大學の學生であり、昇降機の運轉手で又ベルボーイを兼ねた者も大學の學生であり、大學前のキャフェ・テリアの給仕人の若干も學生であり、又職員學生倶樂部ともいふべき所謂「ユニオン」では、散髪職人の專門技術者と、料理人とを除いては、給仕、受付、出納、皿洗、室内掃除等すべて學生である。而して彼等はそれを恥しいとも何とも思つてゐない。

△日本のことである。大學を出たばかりの法學士が始めて鐵道省に奉職して、

現業見習の爲め、田端驛勤務を命ぜられ、列車の發著毎に田端ァ田端ァと呼び歩くことを言ひ付かつた。その法學士先生何としても極りがわるく、室を出る時に四方を見廻はして見知つた顔のありやなしやを伺ひ、そつとプラットフォームにぬけ出るや、人に顔を見られぬやうに、成るべく下を俯向いて喉にからんだ唾を吐き出すやうに田端ァ田端ァを一二聲發して、撥ね返されたやうに自分の室に引込み、額から流れ出た汗を拭き取つたといふ彼自らの話をきいたことがある。日本の學生はこれである。善惡の評價は別として、とにかく日本學生の心持は、大抵法學士のそれによつて代表される。然るに此國では、飯屋で給仕されて飯をいたゞくのも學生、それに給仕するのも學生、一時間の後には彼等は同じデスクに腰かけて同じ教授の講義に參聽するのである。給仕する學生も恥しいと思はず、給仕される學生も蔑むやうなことはない。勞働神聖の意味がそゞろに味はされる。

△ミシガン大學の文學部に、此一學年間だけ招聘されて來て重に美學を講じてゐた英國オックスフォード大學教授のキャリットといふ人がをる。此人もこの學生の勞働といふ事柄には非常に興味を以て觀てゐた、牛津の學生の中にも自己支辨の學生がないことはないが、しかしこちらのやうに筋肉勞働をすることはない、大抵家庭教師位の所であるといつた。

△米國の學生々活の一面であるが、今一つ面白い事柄がある。それはフラターニチー、及ソロリチーの組織である。フラターニチーのことについては是まで書かれたものが我が日本文でも若干はあるやうであるから、今詳しく語ることを略しておくが、フラターニチーは男學生の團體、ソロリチーは女學生のそれである。

△フラターニチーは必ずデルタ・ファイ、とか、ファイ・デルタ・テータとか、テータ・デルタ・シグマとかいつたやうに二つ又三つの希臘文字を冠した特別の名を有つてをる。而してその希臘文字は或る希臘語のイニシアルで、その希臘語はそのフラターニチーの精神又は主義を表はす語であつて、而してその語の何であるかはその會員のみがそれを知つてゐるもので、それ以外の人には何人にも告げてならぬ秘密のものである。その意味に於いてフラターニチーは一種の秘密結社だといはれてをる。

△フラターニチーに加盟せんとする者は會員二名以上の紹介を以て入會を申

込み、委員の詮衡を經なければならぬ、一旦加盟すれば、その人は生涯そのフラターニチーの部員である。

△フラターニチーは必ず其會堂兼寄宿舍を有つてをる。ミシガン大學には此等の寄宿舍の數が別して多いやうであつて、電話帳によつて私の調べただけでも、フラターニチーとソロリチーとを合せると九十九會ほどあつた。それ等の會堂の寄宿舍は、中には粗雜な建築もなくはなかつたが、多くは實に立派な住宅的建築で、學生の住所としてはむしろ贅澤に流れてゐると思はれる程のものも尠くない。

△少しも勞働を厭はない米國學生のことであるから此等の寄宿舍は文字通りの全くの自治で、料理の外のことは、掃除、整頓その他一切皆學生自身がする。殊にそれ等は所謂フレッシュマンといはれてゐる新入の學生達がする。一ケ年經過して來年の新入學生の入つて來るまでは、本年度新入の學生達がする。一ケ年經過して來年の新入學生の入つて來るまでは、本年度新入の學生達は皆フレッシュマンで、種々のヘーヂングに會つて中々辛い思ひをするさうである。

△フラタ！ニチーは前に述べたやうに、一旦加盟すれば、生涯の部員で、隨てあるフラターニチーの出身者は、機會のある毎にその會堂に出入して代り〳〵新しくなる會員達と交を盟ひ、更に舊い連中同志が落ち合つては舊交を溫める處の、縱に時間的結合であると同時に、又横に空間的結合である。それは如何なることかといへば、例へばデルタ・ファイのフラターニチーについていへば、そのフラターニチーはある大學の所在地に一ケ處あると限つた譯でなく、甲の大學所在地にもあれば、乙のそこにも、丙のそこにも、種々の處にある。そこである人が甲地のデルタ・ファイのフラターニチーの會員であれば、彼は乙の處にでも、丙の處にでも、何處へ行つても泊めてもらうことが出來る。

△米國のフラターニチーは、ある點では獨逸のブルシェンシャフトに似てをり、ある點に於いては英國の大學カレージの寄宿舍に似てをり、又ある點に於いては、中世紀のギルド制度に似てゐる點があるが、それ等とは又異つてをる者である。何處か宗教に關係してゐる處もあるやうだが、しかし一切の宗派から超越してをる。この起源は相當に舊い者で、今では米國の大學所在地に何處にでも觀られうる大きな制度になつてをる。（あまり長くなるから今回はこれで擱筆する）

昭和七年十一月十五日印刷
昭和七年十一月二十日發行

藤井博士全集 第八卷

定價 三圓五十錢

玉川學園出版部

版權者 藤井元一

發行者 大杉重一郎
發兼印刷者 小原國芳

發行所 東京府下東町田町本町田 玉川學園出版部 振替東京二六六五番 電話町田六八番

發賣元 東京市淀橋區西大久保一ノ五一五 玉川學園出版部 振替東京一五四二三番 電話四谷四六四八番

藤井博士全集

（卷號）	（書名）	（合本定價）	（分冊定價）
第一卷	BA倫理學方法論 倫理學研究	三、五〇	一、五〇 一、五〇
第二卷	主觀道德學要旨	三、五〇	三、〇〇
第三卷	倫理學原論	三、五〇	三、〇〇
第四卷	BA正義の研究 國家の倫理	三、五〇	一、五〇 一、五〇
第五卷	BA倫理と經濟 マルキシズム批判	三、五〇	一、五〇 一、五〇
第六卷	國民道德論	三、五〇	三、〇〇
第七卷	BA倫理と教育 日本特有道德の研究	三、五〇	一、五〇 一、五〇
第八卷	BA現代思潮批判 自然の世界から理想の世界へ	三、五〇	一、五〇 一、五〇

昭和七年十一月十五日印刷
昭和七年十一月二十日發行

藤井博士全集 第八卷

定價 三圓五十錢

版權者 藤井元一

大杉印刷所
發行者 小原國芳
發行所 東京府下町田町本町田 玉川學園出版部
振替東京一六六五番 電話町田六八番
發賣元 東京市淀橋區西大久保一ノ五一五 玉川學園出版部
振替東京一五四二三番 電話四谷四六四八番

藤井博士全集

（巻號）	（分冊）	（書名）	（合本定價）	（分冊定價）
第一巻	BA	倫理學方法論	三、五〇	一、五〇
	BB	倫理學研究		一、五〇
第二巻		主觀道德學要旨	三、五〇	三、〇〇
第三巻		倫理學原論	三、五〇	三、〇〇
第四巻	BA	正義の研究	三、五〇	一、五〇
	BB	國家の倫理		一、五〇
第五巻	BA	倫理と經濟	三、五〇	一、五〇
	BB	マルキシズム批判		一、五〇
第六巻		國民道德論	三、五〇	三、〇〇
第七巻	BA	倫理と教育	三、五〇	一、五〇
	BB	日本特有道德の研究		一、五〇
第八巻	BA	現代思潮批判	三、五〇	一、五〇
	BB	自然の世界から理想の世界へ		一、五〇

終